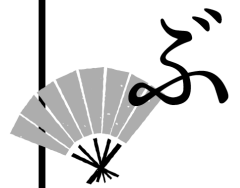


古典落語



に学



落語家

立川談四楼

第五十五回

熊くまの皮かわ

人

のいい甚兵衛さん。思ったことを言ってしまうが、なぜか嫌われない。つまり人徳がある。しかしカミさんには尻に敷かれっぱなしで、言いなりにこき使われている。

「いま帰ったよ」「ずいぶん早いじゃないか」「野菜がみんな売れたんだ」「本当かい。捨てちまったんじゃないだろうね。売り上げを見せてごらん。あらホントにある。上がるのは待って。水を汲んできておくれ」「水ぐらいおめえが汲めよ」「立ってるおまえの方が井戸に近いじゃないか。汲んできたかい、じゃあその甕かめに空けて。そこに釜があるだろ、米が入ってるから研と

いじゃつとくれ」「オレが研ぐのか?」「あら知らないのかい、米は水を汲んだ人に研がれるのを喜ぶんだよ。研いだかい。さ、横丁の先生とこ行つとくれ」「待てよ、オレはまだ家に上がってねえよ」「だからそのお使いが済んだらだよ」「医者のもとに何しに?」「あの先生、お屋敷に出入りしてるだろ。そこで祝い事があったとかで、お赤飯をお裾分けにもらったからそのお礼」「だったら会った時にこないだはどうもでいいじゃねえか」「あのね、世の中は礼儀が大事なの。お待ち。行ったら、ごめんどさいましとちゃんと言うんだよ。すると書生さんが出て

くるから、先生はご在宅でしょうかと聞くんだ。居るとなつて初めて上がらしてもらおう。先生と会ったら口上だ。まずは承りますれば」「何だいそりゃ」「意味なんかどうでもいいの。承りますればと音で覚えるんだよ。お屋敷に祝い事があつたそうでおめでとうございます。つきましてはてまえどもまでお裾分けの赤飯をいただきましてありがとうございます。ここまで大丈夫かい。でもこの先が肝心だよ。ここだけは必ず言うんだ。女房がよろしく申しましたと。さ、行つといで」

う

ちのカミさんは人使いが荒いなあ。雑巾だったら擦り切れてるぜ。新婚の頃は優しくて可愛かつたんだけどなあ。いつからこうなった？ そうである時、カミさんがオレに「オイ」と言つて、オレが「ハイ」と答えて、あれからこうなったんだ。世間も言うよ、甚兵衛さんはカミさんの尻に敷かれてるつて。あれよく考えたら褒め言葉じゃねえんだ。

「ごめんくださいまし」「これはお長屋の甚兵衛さんで。どんなご用でしょう」「先生はご臨終でしょうか」「これはいきなりきましたね。少々お待ちを。先生、お長屋の甚兵衛さんが見えて、大変物騒なことを言っております」「ほう、甚兵衛さんが。私はあの人が大好きなんだ。お通ししなさい。さ、甚兵

衛さん、こちらへどうぞ」「先生、あつしはさつき挨拶を間違えたようです。もう一度やらしてください。先生はご在宅でしょうか」「はい、在宅ですからあなたの目の前におります」「承り、うけた、うけうけ玉川に行きますか？」「いえ玉川には行きません。ははあ、甚兵衛さん、あなたはもしや承りますればと言いたいのかな」「ああそれです。では続きを。お屋敷に不幸があつたとかでご愁傷さまです。てまえどもまで石塔をいただきましてありがとうございます」「これは驚きました。甚兵衛さん、それはこういうことです。お屋敷にお嬢さんがいらしてご病気になった。私の処方した薬が効いて全快、それでお祝いとなつたのです。で石塔ではなく赤飯のお裾分けをと」「ああそういうことで。他にも何かもらいましたか？」「おまえさんが敷いている熊の皮などもな」「これですか。ずいぶん毛深い座布団だなと。熊つてえと山ん中にいる？」「そうです」「鉄砲で撃つたんですか？」「さあどう捕つたかは知りませんが、高級品だとか」「熊の皮つて一体何のためにあるんですか？」「まあひと言で言えば、尻に敷くものじゃな」「あ、尻に敷く？先生、女房がよろしく申しました」

甚兵衛さん、思い出してよかったですねえ。